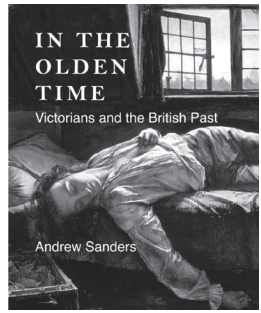
書　評

Andrew Sanders, *In the Olden Time: Victorians and the British Past*
(New Haven: Yale University Press, 2013)



木島　菜菜子

本書は、ヴィクトリア朝の作家や画家、歴史家が彼らの作品においてイギリスの過去をどのように取り上げていたのかを仔細に検証したものである。本書はその試みにおいて、主にヴィクトリア朝絵画に表現された過去を読み解いた Roy Strong, *And When Did You Last See Your Father?: The Victorian Painter and British History* (1978) の仕事を引き継ぐものであると言え、実際、取り上げる文学、絵画作品は重なるものも多い。しかし Strong の研究をふまえた上で本書はその対象を絵画だけでなく、小説、詩、演劇、歴史書、そして建築や音楽にまで広げた意欲作である。ディケンズ研究で知られるのみならず *The Short Oxford History of English Literature* (1994) などの著者として文学研究者としては改めて紹介されるまでもないサンダーズは、文学作品だけでなく当時の旅行ガイドブックから絵画・建築批評などにも精通しており、膨大な資料を縦横無尽に駆使して本書を執筆している。歴史書に関しては特に、出版当初から強い影響力を持ったトーマス・マコーリーの *History of England* (1848-61) を中心に取り上げているが、その他全 12 巻に及ぶ J.A. Froude の著作 (1856-64) から若い読者向けに書かれた Elizabeth Penrose の *Mrs Markham's A History of England* (1875) などにまで幅広く目が配られている。このようにヴィクトリア朝文化全般に関する豊富な知識をもって行われる本書の包括的研究はサンダーズならではのものといえよう。

さて本書は、イギリスの過去とはいっても 16 世紀半ば以降の歴史を扱う。検討の対象となるのは古代や中世の遺物ではなく、19 世紀当時、依然として機能性を維持していた建築や、その趣味や人柄において人々の間

でなお影響力をもっていた歴史上の人物である。具体的には、「ヴィクトリア朝時代の多くの人々がなじみがあると感じつつも、自分たちの生きる時代とは本質的に異なる」と感じていた時代から、時代を代表する作家や画家たちの多くが多感な子ども時代を過ごした 1830 年代までを射程に入れている (10)。

このように扱う時代も広範囲ながら検討対象も多岐に渡る本書は、多くの引用や図版資料を含む情報量に富む著作となっており、何か一貫した論点を提出しようとしたものではない。A. N. ウィルソンが本書の書評で言及しているように、本書の特徴はその分析ではなく細かい事柄を丁寧に拾い上げた点にある (*TLS*. 3 Jan 2014, 7)。サンダーズは 1978 年に出版した *The Victorian Historical Novel 1840-1880* の序文において、19 世紀は過去に対する関心が非常に高い時代であったと述べ、それはその時代が政治や社会、科学の分野において前例のないスケールでの変化を経験したためであると述べていた。新しい現実と向き合い新しい思想を形作るために彼らは過去を振り返りそれまで引き継いできたものを再検討しふるいにかけることとなったというのである (*The Victorian Historical Novel* 1)。本書 *In the Olden Time* においてもこの視点は、特に改めて強調はされないものの、保たれているように思われる。その一方で本書の独自性は、幅広い文化事象に目を配り、そこにあらわれているヴィクトリア朝の過去に対する関心を多面的に検証したところにある。

本書の第 1 章から第 5 章は、エリザベス朝からウィリアム 4 世の時代までを 5 つの時代区分に分けて取り上げ、それぞれの時代について言及したヴィクトリア朝の文章や絵画作品、過去の建築に関する評価などを具体的に検討することで、各時代に対するヴィクトリア朝時代の人々の見方を考察している。例えば第 1 章では、エリザベス朝に対する矛盾した二つの見方、すなわちマナーハウスやカントリーハウスなどの優れた建築物を多く生み出しイギリスの景観を作った時代とする見方と、独断的で冷淡なエリザベス女王が権力をふるった時代とする見方とが存在したことが示される。前者に関してはそうした大邸宅の所有者の変遷や保存の過程が具体例をもって紹介され、後者に関してはエリザベス 1 世に対する否定的な見方がスコットランド女王メアリへの共感と対比させられることによって示

される。その対比は例えば Augustus Egg の *Queen Elizabeth Discovers She is No Longer Young* (1848) に描かれた老齢のしかめ面のエリザベス女王と Robert Herdman の *The Execution of Mary, Queen of Scots* (1867) に描かれた処刑目前にして威厳に満ちたメアリの姿でもって示される。またこの章ではシェイクスピアの評価に関しても論じられ、不明な点の多いシェイクスピアの人生はヴィクトリア朝において、貧しい田舎者がその才覚によって困難を乗り越え名声を得たといった物語に仕立てあげられたこと、こうしてこの時代に「シェイクスピアのイギリス」(53) が生み出され、1864 年にストラットフォードで開催されたシェイクスピアの生誕 300 年祭は、1860 年に開通した鉄道も手伝って、1769 年の生誕 200 年祭よりも遥かに盛大に国を挙げて祝われたことなどが述べられる。

第 2 章では「最初のイギリスの建築家」イニゴー・ジョーンズや詩人ジョージ・ハーバートがこの時代において極めて高い評価を得るようになったことや、ウエストミンスター宮殿の The Peers Corridor を飾る Charles West Cope によるイギリス革命を描いた一連の作品にみられる現代的な革命の解釈、カーライルにとってのクロムウェル像などが論じられる。そして第 3 章では、イギリス革命の時代が終わると 1688 年以降の歴史には非道な王や内乱は登場しなくなり、「おもしろい」歴史は終わったことが、例えばマコーレーの『イギリス史』がウィリアム 3 世の死で終わっていることを例に述べられる。その一方で、アン女王の治世はサッカレーの小説『ヘンリー・エズモンド』のおかげで人気を博し、1870 年代にはゴシック・リバイバルの影響も受けて「アン女王」スタイルと呼ばれる建築スタイルが流行したこと、そうした建築からひいては生活スタイルまでアン女王の治世に結びつくものは急進的な社会改革と結びつけられていったことが指摘される。ここで特筆すべきは、この「アン女王」運動には過去に対するセンチメンタルな愛着はなく、ただ都市化と産業革命によってもたらされた貧困や醜悪さから文明を再構築しようという意図が読み取れることだ、と著者は述べる (180)。

第 4 章ではハノーヴァー朝時代に焦点が当てられるが、前章の議論を引き継ぎ、例えばジョン・エヴァレット・ミレイの *The Minuet* (1866) に見られるように、多くの作品がモデルに 18 世紀の衣装をまとわせながら

も過去をあとにして 19 世紀へと足を踏み出していることを表現させているという。絵画においては、前世紀の衣装が 19 世紀後半にいっそう人気を増す一方で、名誉革命以降のイギリス史はドラマチックな要素に、すなわち描く主題としての出来事に欠けていた。そのため画家にとっては、過去や理想を描くことよりも現在における現実が重要となり、ミレイもまた絵画の観衆が求めているのはより現実に力点を置くことだと感じていたのだ、とサンダーズは主張する。

最終章はリージェンシーからウィリアム 4 世の時代を扱うが、この時代はよく言われるように典型的な「ヴィクトリア朝時代の人物」と称される著名人の多くが生まれ育った時代である。彼らは大英帝国が大きな変化を遂げるこの時代に自らも成長期を迎えた。例えばディケンズもジョージ・エリオットもその作品の中でめったにノスタルジアには陥らないものの、彼らの世代が経験したいくつもの変化を整理し、直近の過去がいかに現在を形作っているのかということを探ろうとしていると著者は述べる。

こうして 16 世紀以降のイギリスの過去に関する、ヴィクトリア朝の多様な作品に表現された評価や見方、ひいては偏見や作り話が様々な角度から明らかにされるが、本書の最初と最後で確認されるのは、ヴィクトリア朝時代の人々が共有した近代化の流れ、すなわち世俗化や大衆化といった大局的な歴史の流れである。表紙カバーにも印刷され、序文でもまず言及されるのは 1856 年に発表された Henry Wallis の *The Death of Chatterton* で、この若い無名詩人の自殺を描いた作品が当時人気を博したことが紹介される。著者はこの作品を「新種の歴史画」と呼び、この作品においてかつては宗教者や王侯貴族が独占していた絵画の図像となりうる尊厳が一般の人々に与えられたと論じる (4)。この例にみられるように 19 世紀以降の歴史画は、歴史小説や歴史書と同様に、その対象を特別なものでなく平凡なものに、特殊なものでなく典型的なものに合わせていった。そして本書の結びで言及されるように、この流れは 20 世紀にも引き継がれている。かつてウェリントンの軍隊やネルソンの海軍の一般兵士たちの死が公に追悼されることはなかったが、第一次世界大戦では亡くなったすべての兵士の名前が挙げられその地位の上下に関わらず葬られるようになり、身元不明の場合にも歴代の王や政治家たちとともにウエストミンスター寺院に埋

葬された。19 世紀以降のこうした世俗化の波は、ヴィクトリア朝の人々が権威的なエリザベスに否定的感情を抱いたのに対し、庶民的なヴィクトリア女王に好意的であったことにも印象的に見て取ることができる。クリミア戦争とセポイの反乱を除いて大きな戦いもなく安定した時代であったヴィクトリア朝は、その人生にドラマチックな要素はないかもしれないが終生夫に貞節を守り母性的で温厚であった女王の性格を反映しているとも言え、この時代は、社会の「均一化」が起こっていった時代、権力も庇護の力も王室から教養のある貴族層へ、また富裕で教育を受けたブルジョアジーへと移っていった時代であった (315)。

以上に見てきたように、本書は各時代に関するヴィクトリア朝時代の人々の見方を多方面から紹介し、折に触れてそれらの興味深い分析を行う一方で、そうした各要素を一つの全体像に集約させようとはしていない。ウィルソンは本書に欠点があるとすればスコットへの言及が少なすぎることだと述べているが、しかしおそらく多くの読者は *The Victorian Historical Novel* でサンダーズがスコットに与えた重要性を思い返し、本書では小説の枠を超えた文化論を試みたということがその欠点を補っていると感じるのではないだろうか。本書は、扱う時代範囲の広さに伴う豊富な一次資料を明快で読みやすいものにしたサンダーズの力量にあふれた、そして美しいフルカラーで他では見る機会の少ない図版を多分に含んだ優れた著作と言えるだろう。